



Title	日本語モダリティの史的研究
Author(s)	高山, 善行
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3155732
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	高山善行
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第14850号
学位授与年月日	平成11年6月10日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	日本語モダリティの史的研究
論文審査委員	(主査) 教授 前田富祺 (副査) 教授 蜂矢真郷 助教授 金水敏

論文内容の要旨

本論文は、日本語モダリティの史的側面を中古語を中心に研究したものである。本論文の内容は最初に序論「研究の方法」を置き、以下第一部「文とモダリティ助動詞の交渉」—総論篇一、第二部「モダリティ助動詞の機能と意味」—各論篇一の二部構成になっている。400字詰め原稿用紙にしておよそ800枚ほどからなる。

文論には、「文成立論」「文構造論」「文表現論」という三つの柱があるが、第一部は、主に後二者の観点からの、文とモダリティ助動詞との関係についての総体的研究である。

本論文では、モダリティ助動詞相互の承接関係、テンス形式、アスペクト形式、否定形式、文末形式（終助詞）との承接関係を明らかにし、モダリティ助動詞の階層性を提示する。「時間節」「仮定節」「理由節」「逆接節」という四つの従属節について調査すると、モダリティ助動詞はこれらの節において生起の仕方が異なるが、それは助動詞の意味的階層の存在を示しているのである。次に、係り結び（狭義）とモダリティ助動詞との関係について実態調査を行い、その結果からモダリティ助動詞の三つの意味的階層を明らかにした。また、中古語の叙法副詞カナラズは《蓋然性表示》を表す上で複合形式テム、ナムと多く相関することが確認される。以上の考究の結果によって、モダリティ助動詞を、〈様態性〉〈推定性〉〈想定性〉という三つの階層に位置づけた。

次に、文表現とモダリティ助動詞との関係について考究する。疑問表現とモダリティ助動詞との関係では、モダリティ助動詞にも疑問化可能なグループと疑問化不可能なグループがあり、狭義《推量》と狭義《推定》の違いとして捉えられることが分かった。モダリティ助動詞は仮定条件節の帰結になるものとならないものとに分けられるが、それはそれぞれの助動詞の持つ《非現実性》と《現実性》という意味的特徴を反映するものと考えられる。否定表現との関係では、モダリティ助動詞と否定辞との承接関係を調査し、否定化可能なベシの特殊性、否定辞が上接しないラムの特殊性を確認した。以上三つの文表現（疑問表現、仮定表現、否定表現）との関係の検討から、モダリティ助動詞に《推定性》《事態性》《現実性》という意味的特徴を設定し、示差性を示して整理した。

第二部では、第一部での総体的研究を踏まえた個別的研究を行う。「断定のモダリティ」では、ナリという表現形式をめぐっての考究が中心となる。「ナリ論争」の検討を踏まえて、連体ナリと終止ナリの差異を主に構文的観点から明

らかにする。終止ナリはメリと類似性を持つことを確認した上で、事態めあてのモダリティ形成として位置づける。一方、連体ナリは、直接、文構成に関わるコプラ形式であると位置づける。「断定の助動詞」として一括されてきた、連体ナリと体言ナリとは連体ナリは文レベルで作用するコプラであり、体言ナリは節レベルで作用するコプラであって次元が異なるものであるとする。

「推量のモダリティ」では、まず、ベシの意味は《事態的意味》から《判断的意味》へと変化していることを明らかにした。次に、メリ、終止ナリにテンス形式のキ、ツが下接した場合は、話し手がある状況を観察して他者に報告する文での使用が顕著であることが分かる。連体ナリに下接可能なムは相対的に《現実性》が濃く、下接できないマシは《非現実性》が濃いモダリティ形式であることが確認される。モダリティ助動詞は、ラムだけは、準体句中に生起しているように見えるが、その場合のラムは準体句の外にあると見るべきであるとする。次に、第一部では問題提起を承け、複合形式ザラムとザルラムとの機能分担について論じる。散文では、ザラムの使用によってザルラムの使用が抑制されており、和歌においてのみザルラムの使用が認められる。また、中古語の否定推量形式が構文機能によって使い分けられていることを明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

文は客観的な事態を表す部分と話し手の心的態度を表す部分から構成される。後者をモダリティと呼ぶ。日本語のモダリティ研究は現代語を中心に進められ、確実に成果を挙げてきた。しかし、史的研究の分野では、個別研究は見られるものの、まだ体系的な研究が行われていない。また、分析が意味的観点に偏り、構文機能の観点からの研究が十分でない。史的研究の分野において、モダリティの体系的研究がなされるべきである。本論文は、史的対照という方法を積極的に導入し、現代語のモダリティ助動詞と中古語のモダリティ助動詞を対照されることによって、モダリティの史的研究に大きな成果を挙げたのである。

第一部では現代日本語の研究で成果を挙げた階層構造分析に基づき、中古語モダリティの統語構成上の位置付けをしたこと、第二部では、モダリティ助動詞の個別の分析を進めるなかで、統語論的な分析に基づく説得力のある結論を出したことが高く評価される。ただし、問題の大きさゆえに今後に残した課題も多い。特に史的対照という対法によるため、共時的な研究に中心が置かれ、歴史的な変化の面はやや手薄になった観がある。中世、近世についてはさらに今後の研究が必要であろう。また、個別の研究は文末用法の分析が中心であること、助動詞形式以外のモダリティ形式について触れるところが少ないと問題であろう。

しかし、本論文は、従来研究の遅れていた日本語モダリティの史的研究を範囲を限定しながらも理論的、体系的に進めた画期的な論文であり、中古語以外についても同様な研究方法を適用することの可能性を示すとともに、現代日本語のモダリティ研究の理論に反省を促すような側面もある優れた論文であると言えよう。このような次第で本研究科委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。